

ムラサメ

作・坂本鈴

【登場人物】

栗原 (大学生)

由美 (大学生)

柴本 (大学生)

中村 (大学生)

香 (大学生)

教授

【プロローグ】

そこは大学の教室。

教授　　えー、このテキストに登場する、村雨という刀。この刀は元々江戸時代後期の読本に登場する架空の刀で、村雨丸とも呼ばれています。村雨丸は、しばしば呪われた刀、妖刀などと称されながら、後世の創作に影響を及ぼしていますが、これらのエピソードは、実際に妖刀伝説のあった村正という日本刀から着想されたのではないかという見方もされています。妖刀伝説には実にさまざまな種類がありますが、今回取扱うものは、「血を浴びれば浴びるほど、切れ味を増す」という妖刀伝説が使われていますね。

(着信音)

ちよつと、だれですか。授業中は切つとくように、ポケベル。はい、じゃあ、その内容にはいつていきますが、そのまえに、一度、ちよつと、とりあえず読んでみましょうか。じゃあ、はい、君、一行目から読んで。

生徒1　その刀はどんなものも切り裂く。

教授　　はい。じゃあ次、隣。

生徒2　しなやかに、やさしく、鋭く、貫いて、切り捨てる。そして、血を浴びれば浴びるほど強く鋭くなっていく、伝説の刀。

教授　　はい、次。

生徒3　誰にも使いこなすことが出来ないといわれ、恐れられていたその刀を、ひとりの剣士が手に取った。そして、男はその日から、敵なしの剣豪になった。

【遅刻しちゃおう】

シーン変わって、教室の外。生徒の柴本と中村が話をしている。

柴本　　中村、遅刻じゃね。つぎどこだっけ。

中村　　三号館。

柴本　　遠！

中村　　あれ、栗原は？

柴本　　え？ さっきまで。

中村　　またあれか。

柴本　　あれ？

中村　　女。

柴本　　栗原って彼女いんの？

中村　　は。

柴本　　え。おまえしらねーの。

中村　　なにが。

柴本　　あいつのノルマ。

中村　　ノルマ？

柴本　　月に三人の女とやるのがノルマなんだって。

柴本　　は、なにそれ。おかしくね。

中村 わからんけど、なんかバイクで走るらしいよ。
柴本 バイク？
中村 バイクの栗原っていったらおまえ。
柴本 なんだそれ。うさんくせえ。

【バイク男】

別空間に栗原が現われる。

栗原 俺は当時、女とやることに躍起になっていた。そのときはちょうど月末、まだ二人の女しか抱いていなかった俺は、ノルマまで、あと一人という状況に焦りまくっていた。そして、そのよく晴れた日の三限目、友達の友達というよく知らない女をつれて、学校からぬけだした。

栗原 乗んな。

由美 うん。

栗原 つかまれよ。

由美 うん。

中村 バイクってなんかいいかんじらしくて、生身でスピード出でて、横に車びゅんびゅんとおってるってかんじ？ つまり危ないって感じが、ほら、なんていうんだっけ、あるじゃん、つり橋？ 危ないつり橋を二人で渡ると恋が生まれるてきな？ 非日常から生まれる恋てきな？ そんなにうまくいかないだろ。

中村 いや、ところがさ。

由美 すごーい、こわーい。

栗原 しっかりつかまってな。

由美 うん。なんかさ。

栗原 なに。

由美 なんかふしぎ。

栗原 なにが。

由美 日常から離れていくかんじ。

中村 な、

柴本 うん。

中村 非日常なバイクに乗って、どんどん日常から遠ざかるみたいな。そして退屈な日常から遠くはなれて行く先は？

柴本 非日常の国？

中村 非日常の国てきなもの、と、いえは？

栗原 ほら、ねずみーランド。

由美 あ、マッキー★

柴本 ねずみーランド！

中村 いや、え。

中村 金のない大学生は、女をつれて、毎回そんなところには行けないわけで。

由美 え、通り過ぎるの？

中村 夢の国をまっすぐに通り過ぎ、向かうは青春まっしぐら。耳をすますと、青春。青春の音がきこえてきたりするって感じ？

柴本 は、なに、どんな音？

中村 ざざーん、ざざーん。

柴本 (かもめの鳴き声)

由美 ああー、きれー！！

栗原 きれいだろ。

由美 すごい、おりにいい？

栗原 ああ。

由美、走る。栗原、おいかける。青春ドラマみたいなかんじ追かけっこして水をかけ合う。

由美 つかまえて。

栗原 こら、まてよ。

由美 えい。

栗原 やったなー。えい。

由美 きゃあ。

由美、転ぶ。

由美 あーあ。

栗原 あ、ごめん、大丈夫。

栗原、手を差し出す。由美、その手をとろうとして。

由美 ありがとう。

しかし直前で水をかける。

由美 えい！

栗原 うわ。あーあ。

目が合い、笑いあう二人。

由美 びしょぬれだね。

栗原 びしょぬれだ。
由美 あ、夕日。
栗原 あ。
由美 綺麗だね。
栗原 うん。綺麗。
由美 あー、お腹すいたね。
栗原 そうだね。
由美 このまま、レストランいったら怒られるかな。
栗原 絶対怒られるね。
由美 うーん、ねえ。
栗原 なに。
由美 部屋、行っていない？
栗原 え。
由美 なんかも、つくってあげるよ。
栗原 まじで。
由美 うん。

二人、手をつないで去る。

【神業ね】

中村 みたいなかんじで、お持ちかえるわけですよ。
柴本 うわー、なにそれ、すげえ神業。
中村 がちや。ここ、俺の部屋。ああ、もう塩でばりばりだな。シャワーあびる？ みたいな。
柴本 そんなにうまくいくもの。
中村 いくんだよ。あいつは、なぜか。
柴本 世の中ってなんで不平等なんだろう。
中村 ほんとにな。あ、遅刻じゃね。
柴本 お、やべえ。
中村 ま、おれ達凡人は、つまらない日常にもどりましたよ。
柴本 はーい。次なんだっけ。
中村 日本文学概論。
柴本 課題なかったっけ。
中村 来週じゃね。
柴本 お。結構すぎてんぞ。
中村 おお！

【予想通り】

柴本、中村、去る。と、そこは栗原の部屋。

栗原 塩でばりばりだね。シャワーあびる？

由美 え。うん。じゃあ、あとで。先に浴びなよ。
栗原 そう。
由美 うん。
栗原 じゃあ。

栗原、シャワーに向かう。と、香がやってくる。

【友達の話】

香 ともだちの話なんですけど、なんか、月に三人から告白されないとダメみたいな女の子がいて、でも、確実に全員断るんですけど、私ときにはなんか、ひどいだろそれ、みたいな。言わせといて切り捨てるみたいな。切捨てごめんみたいな。通り魔かよ、とか思うんですけど、まあ、その子ときには？ 美学とかあるみたいで、気のあるそぶりは見せるし、部屋とかもほいほいついてくんですけども、絶対にやらないっていうか。なんで？

由美 なんで、つて、やらないでしょ。別に惚れてもないのに。

香 じゃなくて、なんで、惚れてもないのに、部屋とかいくの？

由美 だめ？

香 だめじゃないけど。

由美 だってさ、喜ぶじゃん。部屋とかいくと。楽しいよ。男が浮かれてて。エビマヨネーズ炒めとかつくと大喜びしてくれて。

香 ほんっと、あんたそれしかつくれないよね。

由美 そうだけど。

香 そのうちエビマヨの女とか言われるわよ。

由美 言わないわよ。

香 あぶなくないの。

由美 なにが。

香 無理やりとか、あったらどうすんの。

由美 ないよ。

香 なんで。

由美 私のが好きだから。

香 ふうん。

由美 あと、全然脈がないと告ったりしてこないから。ちよっと、脈あるぞみたいなどこもみせないときで、まんまと告白してきたら、ざっくり斬ると。

由美 うん。

香 それさ、きもちいい？

由美 最高。

香 あのさ、

由美 なに。

香 血を浴びて強くなる刀の話、よんだ？

由美 え。なに。

香 たまには授業おいでよ。はい、これ文学概論の課題作。

香、由美に本を渡す。

由美 うそ。課題、いつ。

香 再来週。

由美 うわ。香はいいの。

香 わたし、もう読んだし。書いたし。

由美 すごいね。

香 普通じゃない？ 結構おもしろいよ。なんかね、似てるかも。

由美 似てるって。

香 由美に。じゃあね。

香、去る。由美、本をながめ、

由美 村雨……。

【ヒュムンちゃん】

と、栗原がシャワーからもどってくる。

栗原 お。なんの本。

由美 概論の課題。

栗原 今日サボったやつ？

由美 うん。来週課題なんだって。先週友達がかしてくれたの。

栗原 へえ。

由美 シャワーかりてい？

栗原 あ、うん。どうぞ。

由美、本を置き、シャワーに向かう。栗原、本を手にする。

栗原 血をあびれば浴びるほどつよくなるムラサメ。しかし、

由美（声）ねえ、タオルどこ。

栗原 ああ、ごめん。

栗原、去る。そこに柴本がやってきて本を拾う。

柴本 しかし、剣士はまだ知らなかった。このときに戦った相手もまた、伝説の刀を扱う剣豪であったことを。

栗原、戻ってきていやらしい雰囲気作りにいそしみコンドームの場所をチェックする。と、由美、シヤワーからもどる。思いの他ものすごく早いので動揺する栗原。

由美 ありがとう。
栗原 ええ？ あれ、もうあびたの。早くない？
由美 私、シャワーはやいひとなの。
栗原 へえ。あ、そうなんだ。そっか。
由美 すごい。なんか、ムーディーだね。
栗原 そう？
由美 じゃあ、台所、かりるね。あ、きれいな台所。
栗原 つかわないからね。
由美 そんなこといって、いろんな女の子につくらせてるんじゃないの。
栗原 なにそれ。あ、でもそういう女いるらしいね。
由美 そういうおんな？
栗原 いろんな男に手料理つくる女。
由美 へえ。なにそれ、親切なひと？
栗原 わかんないけど、もてあそぶらしいよ。男心を。
由美 ふうん。
栗原 ねえ、なにつくってくれるの。
由美 ん、エビマヨいため。
栗原 え。
由美 あれ、どしたの。
栗原 いや。
由美 エビだめ？
栗原 大丈夫だけど。
由美 じゃあ、まってるね。

由美、台所へ行く。

柴本 「剣士は、その相手の剣に目をやった、間違いない。聞いたことはあったのだ。目の前の刀は、村雨丸と肩をならべるといふ、妖刀。その名も」
栗原 エビマヨの女……。

【噂話】

と、授業のチャイムが鳴る。そこは教室。生徒達、教室から出る。香と中村と柴本が話している。

香 おつかれえ。
中村 おー、おつかれ。授業一緒だったっけ。
香 そーだよ。
柴本 課題めんどくせえよなあ。
香 私もう終わった。
柴本 まじで？ はやくね。
香 そう？ 結構よみやすいし、おもしろいじゃん。
柴本 そうかあ？ おもしろいかあ？

香 ああ、てゆつか、あれなんだよね。なんか、あたしのなかでは別のおもしろ　っていうか
中村 え、なに、どしたの。
香 いや、なんかね。似てるんだよね、友達に。
柴本 は、なにが。
香 ムラサメ。
柴本 ムラサメ、が？
香 ムラサメ、が、友達、に、にってるの。
中村 ん？　どーゆーこと？
香 だからね、男の子を傷つけまくって、傷つければ傷つけるほどかわいくなるみたいなのがいるんだけど
柴本 さ。血をあびるとつよくなるムラサメみたいじゃない？
柴本 傷つけるって？
香 気もたせて、告らせて、断るの。
中村 うわ。それえげつないね。
香 部屋までいって、手料理とか作るけど、据え膳は食わせん、みたいな。
中村 手料理？
香 エビマヨネーズ炒めしかつくれないけどね。
柴本 エビマヨネーズ？
香 どうかした？
柴本 いや……。その子、由美って子じゃない？
香 そうだけど、……。え？
中村 え、由美？　ほんとに？
柴本 え？
中村 おまえも？
柴本 え、おまえも？
中村、柴本 ああああああああ。
香 えええええええええ？　こくったの？
中村 だってさ、部屋に来るんだぜ？
柴本 エビマヨつくるんだぜ？
中村 気があると思うじゃん。なあ？
柴本 うん。
中村 で、なんか、俺たち今いい感じだなとおもって告ったら、
柴本 気もたせてごめん、みたいな。
中村 好みじゃないんだよね、みたいな。
柴本 お前そこまでいわれたの。
中村 え。
柴本 おれ、そこまで言われてない。
中村 ……まじ。
柴本 うん。
中村 そっか。
香 なんか、まんまとかかかってるね。
中村 ああああああ、しかし由美ちゃん、栗原と同じ種類だったとはー。
香 え。

柴本 ああ、友だちに栗原ってやつがいてさ。

中村 そいつもまあムラサメ系。

香 栗原くんって、二組の？

中村 ああ。

香 バイクのってる？

柴本 うん、それで、海とかいって、髪、塩でバリバリだね、とかいって、部屋連れ込んでやっちゃうんだって。

香 へー……そうなんだ。

間。

中村 え。

香 え。

柴本 え。おまえ。

香 え。いや、ちがうよ。ちがうちがう。ちがうけど、ちがうけど、さあ、なんか

さあ、

柴本 なに？

香 なんかさ、いつそたたかわせたいよね。二人を。

柴本、中村 あー……。

【戦い】

気がつくと別空間に栗原と由美がいる。

栗原 エビマヨの女だったのか。

由美 よし、絶対こくらせるぞ。

栗原 おれは絶対こくらないぞ。でも、絶対にやってやる。

中村、柴本、香、一斉に教科書を開いて読む。

中村、柴本、香 「そして戦いがはじまった。」(ゴング音?)

由美 はい。エビマヨネーズ炒めだよ。

栗原 これが噂の……。

由美 どうかした。

栗原 ううん。いただきます。(食べた瞬間斬られる音)……これは。

柴本 「最初の一太刀。予想以上の重たい剣に、剣士は驚きを隠せずにした。」

由美 どう。

栗原 おいしい。

由美 ほんと？ うれしい。えへ。(また斬られる音)

中村 「そう思っているうちに次の太刀が振ってきた。ぎりぎりでもよけたつもりが袖口がざっくり切れている。冷静になれ、といいきかせ、自分の間合いを戻そうと、必死で呼吸を整える。」

栗原 あ、ビールもあけようか。

由美 でもあたし、あんまり飲めないんだけど。

栗原 じゃあカクテルつくるよ。

由美 え。つくれるの。

栗原 ああ、昔バーテンのバイトやっててき。

由美 うそ。かつこいいい。

栗原 全然カッコよくねえって。じゃあちよつと、甘めのやつな。(斬られる音。悶える由美)

香 「剣士は落ち着きをとりもどし、少しずつ間合いを詰め始めた。」

栗原 ほら、のんでみ。

由美 おいしい。でも酔っ払っちゃいそー。

栗原 よっぱらつちやえよ。

由美 やだ。帰れなくなるもん。

栗原 別に泊まってけばいーじゃん。

由美 えー。でも。

栗原 別になんもしねえって。

由美 ほんとに。

栗原 ほんとほんと。

由美 じゃあそうしちやおうかな。

栗原 お、じゃあ飲もうぜ。

由美 うん。

柴本 「しかし、相手もなかなかの使い手だった。」

由美 かんぱーい★

栗原 …かんぱー…い…。由美ちゃんだいぶ飲めるじゃん。

由美 そうかなあ。もう一本、飲んでい？

栗原 ……いいけど。

中村 「剣豪同士、そう簡単には決着がつかない。」

香 「やがて、夜が明け、あたりが明るくなってきた。」

柴本 「その夜は決着がつくことはなかった。」

【決闘と憂さ晴らし】

中村 「それからなんども二人は決闘をおこなった。」

由美と栗原、殺陣をする。いい勝負。

香 「しかし、かすり傷を作ることはあっても、血しぶきがあがることはなかった。その憂さを晴らすかのように、二人は夜な夜な街に繰り出しはじめた。」

由美、栗原、諦めて夜の町に繰り出す。

栗原 乗んな！

由美 エビマヨネーズ炒めだよ♪

柴本 「そして、容赦なく道行く人を切り捨てる。」

栗原、由美、剣を振るう。斬られる道行く人々。

中村 「血を浴びて、強くなるその二本の刀が、夜の町を踊り狂った。」

栗原、由美 ひとりめ、ふたりめ、さんにんめ、

香 「そして毎晩人々の生き血をすすった刀は勢いをまし、とどまることを知らなかった。」

栗原、由美 よにん。ごにん。ろくにん。なな。はち。きゅう。じゅう。

めった斬りにされて、倒れる人々。

柴本 「しかし、どんなに生き血を浴びようと、剣士たちはもう、昔のような恍惚感を覚えることはできなくなった。それどころか斬って捨てれば捨てるほど、人々の姿が芝居のき割りの景色のように立体感を失って見えるようになり、剣士は虚無感にさいなまれた。空虚で平面な風景の中で、決闘でついた傷口だけが現実感をもっていた。」

【被害者の会】

ポケットベルの音。香、栗原、自分のポケベルに目を落としポケベルのボタンを押す。音、鳴りやむ。が、またすぐ鳴る。鳴りやまない。由美の元に香が居る。

香 凄いな。なに、イタベル？

由美 あー、ううん。ウザベル。

香 男？

由美 まあね。

香 あのさあ、え、ほんと、ちよつと大丈夫？

由美 大丈夫大丈夫。

香 でもさ、最近噂になってるよ。

由美 噂？

香 エビマヨちゃん被害者の会って、知ってる？

由美 え。

別空間であるが、同じ舞台に中村、栗原、柴本、栗原、鳴りやまないポケットベルの電源を切る。

中村 うわ、シカベルかよ。

栗原 だって。

柴本 また女の子。

栗原 まあね。

中村 おまえさ、バイク男被害者の会っての知ってる？

栗原 え。

由美 それって私？

栗原 バイク男って俺のこと。

中村・香 そりゃそうだろう。

栗原、由美 そりゃそうだよね。

中村 お前もさあ、気をつけないとエビマヨちゃんみたいになっちゃうぜ。

香 危ないよ。由美、栗原くんみたいになっちゃうよ。

由美 栗原君？

栗原 エビマヨちゃん？

香 二組の栗原君。知らない？ バイク乗ってる、

柴本 しってるよな。あのエビマヨちゃん。

栗原 まあね。

由美 知らない、こともない、けど。

香 彼、月に三人の女の子と寝るのがノルマだったんだって。

由美 まじ。

香 うん。それで相当恨みかってて、このまえバイクのブレーキ壊されたらしいよ。

由美 ええええ。

柴本 エビマヨちゃん、この前刺されかけたんだって。

栗原 はあああ。

由美、栗原 それで。大丈夫だったの。

香、中村 残念ながら、大丈夫だったらしいけど。

栗原、由美 残念ながら？

香、中村 いや別に。

柴本 だからさ、おまえも気をつけなくて。

香 とにかくさ、ほんとにちよっと、あらためなって。

由美 うん、まあ、そうだけど

香 いや、けどじゃなくて。死ぬよ。そのうち。いや、まじで。

由美 わかってるけど

香 だから、けどじゃなくてさ、……やめなよ。もう。

由美　でも、やめられないよ。もう。

由美、去る。

香　ちよつと、え、由美。

由美を追う香。

柴本　でもあれだね。刺すとか刺されるとかそこまですぐともう事件だよ。

中村　だよな。そこまでやる神経がわからんよ。

栗原　でも俺、わかっちゃうかも。

中村　ん。

栗原　エビマヨちゃんんんの気持ち、わかっちゃうかも。

柴本　どんな気持ち。

栗原　もう後にひけない気持ち。

柴本　……わかる？

中村　いや。

栗原　俺、行ってくるよ。

柴本　どこにだよ。

栗原　エビマヨちゃんんんん。

栗原、去る。

柴本　おい。

中村　なんだあいつ。

【賭博】

そこに香がやってくる。

香　あ、ねえ。

中村　おお。

香　由美みなかった？

中村　エビマヨちゃん？

柴本　なんかいま栗原も探しにいったとこだけど。

香　そうなの。

柴本　うん。

香　それって、戦いはすでに始まっててきな？

柴本　え、なに、そゆこと？

中村　かもね。

柴本　まじで。じゃあさ、じゃあさ、

中村　なに。

柴本　どっちに賭ける？

【最後の戦い】

中村、栗原、香が一齐に教科書をひろげると、由美、栗原、走って飛び込んでくる。

中村 「二人が決闘をするに違いないという噂が駆け巡ると同時に街は博打で賑わった。」

香 「しかし、そんな街の喧騒を遠ざけるかのように、剣士たちは走っていた。」

柴本 「膿んだ傷口がちりちりと痛みを放つ。」

中村 「決闘でついたかすり傷は、時間をかけて化膿していた。」

香 「だんだんと治るはずだった傷口がどんどんひどくなっていく。」

柴本 「切り裂きたい。あいつを。」

中村 「自分に傷をおわせたあいつを貫きたい。」

香 「深く。」

柴本 「深く。」

中村 「深く。」

香 「深く。」

二人、出会う。

由美 ……栗原君。

栗原 由美ちゃん。

柴本 「切り裂きたい。」

中村 「貫きたい。」

香 「いや、本当は、貫かれたかったのかもしれない。と、剣士は思った。」

栗原 刺されかけたんだって。

由美 栗原君こそ。バイクのブレーキ、壊されたんですよ。

栗原 ああ。

由美 もう。無茶ばかり。

栗原 そっちこそ。

柴本 「恨みを買ひ、あだ討ちに会い、ボロボロになっても刀を握り締めている相手の中に、自分自身の姿がみえた。」

栗原、由美 あの。

栗原 あ、いいよ、

由美 ううん。そっちから、いいよ。

中村 「何人もの人間を斬り続けた強さの中に、他人を傷つけ続けることでしか自分を認めることが出来なかった自分自身の弱さを見た。」

栗原 あの、俺、俺たちさ、なんか、似たもの同士って思わない。
由美 うん。わたしも、そう思う。

香 「血を浴びれば浴びるほど強くなる妖刀を扱いながら、血を浴び続けていないと死んでしまう程、弱くな
ってしまった、そんな自分の姿を見た。」

栗原 でもさ、もう、やめない。
由美 え。

栗原 おれだけでいいじゃん。

柴本 「そして、同じ妖刀に蝕まれた相手の中に、自分の死に場所を垣間見た。」

由美 栗原くん。
栗原 由美ちゃん。

中村 「相手に斬られたい自分と自分に斬られたい相手。」

香 「勝負はもう決まっていた。」

栗原 好きだ。

柴本 「相手の刀が身体を綺麗に貫いた。」

中村 「はじめて感じるその痛みは、快樂ですらあった。」

香 「そして、自分の刀もまた相手の心臓を貫いていた。」

柴本 「相打ちだった。」

由美 あたし、そんなつもりじゃなかったの。ごめん。

柴本 「相打ちだった。はずだった。」

栗原 え。

中村 「しかし相手は、するりと身をかわしていた。」

由美 気を持たせて、ごめんね。

香 「剣士の身体から、一気に血が噴きだした。いままで味わったことのない激しい痛みが剣士を襲った。」
柴本 しかし、痛いのは肉体ではない。」

中村 「プライドだった。」

香 「いや、プライドではない。」

由美 私は、栗原君だけじゃだめなの。

柴本 「心だった。」

栗原 あ、そう。

由美 うん。ごめんね。

中村 「剣士としてのプライドというプライドがズタズタに切り刻まれるのを感じながら、いままで自分が斬ってきたものもまた、書き割りでも風景でもなく、人間の心だったのだと実感した。」

栗原 そっか。……そっか。

香 「失われていく意識とは裏腹に、灰色で虚無にみちていた世界が、焼け付くような痛みとともに、現実感を取り戻していた。」

由美、刀を引き抜く。栗原、倒れる。

由美、刀をみつめる。

柴本 「血を浴び続けていないときびついでしまう諸刃の剣が、鮮血を滴らせながら、キラリと鈍い光沢を放つ。」

中村 「生き残った剣士は、静かにその妖刀を鞘におさめた。」

由美 やめられないよ。もう。

香 「今日も生き長らえてしまったことに、安堵と落胆のため息をつきながら」

チャイムの音。

教授 はい。じゃあ、ここまで。来週レポート提出になります。

生徒達 はい。

幕